

# 結社誌を訪ねて

安田 青葉

白壁に日射し集る冬日和

宇多喜代子

「草樹」一一八月号

明るい「白壁」が鮮やかに見えて来る作品である。この白壁は寺に巡らされた白い土塀などか、それとも部屋の中の白い壁や壁紙を思うだろうか。私は後者のように思った。寒い日が続いていたが、久しぶりに良く晴れたひと日を賜ったその時、部屋にいて白壁に集まる日射しが一際眩しいほどであったのだろう。目を細めてしみじみ「良い日和ね」とほほ笑んでいる作者が見えてくるようだ。人生の穏やかな一コマまでを窺うことが出来るあたたい作品である。

現金はかぞへて楽し氷菓買ふ

小川 軽舟

「鷹」八月号

「現金」も素材になるものだと感じた。キャッシュレス決済が主流になってきている昨今ならではの作品である。買ひ物の支払いをする時に、お釣りを切りよく貰えるように考えたりすることがある。また、お財布に小銭がじゃらじゃらしていると、ここぞとばかりに懸命に数えてびびったり払えたりすると小さな達成感を感じたりもする。やはり掲句のように現金を数えて嬉しかったのである。ましてやこの作品の場合の買ったものは「氷菓」なのだから、小銭を持ち合わせていて良かったと満足そうである。余談ながらキャッシュレスの時代とは言え、停電や通信障害が起こ

ることもあるので、現金も持っていた方が良いでしょうだ。

梅雨明を厭ふよはひとなりにけり

暮目 良雨

「春耕」八月号

梅雨は、長雨が続きじめじめとして鬱陶しいものであり、一般的には早く終わってくれないかと梅雨明けを待ち遠しく思うものである。ところが、昨今の異常気象により、今年などは梅雨が明けるか明けないかの内に日本全国において熱中症警戒アラートが発表されるような危険な暑さが襲ってくるようになった。こうなると老若男女問わず梅雨明けを厭いたい気持ちになる。ましてや「よはひ」を重ねた身には余計に暑さが応えられないものだ。地球温暖化防止対策を何とか進められないものだろうか。季節にも、俳句作品にも影響が出てきそうである。

随分と年下の婿溝浚へ

權 未知子

「群青」八月号

最近の町中ではあまり見かけない「溝浚へ」の季語が使われていることに立ち止まった。そして、その溝浚えをしている人物がお嫁さんより多分十も年下であろうお婿さんと分かって詠んでいるところに興味がわいた。もしかしたら兼題で作られた作品かも知れないが、どこか実際に見聞きした景なのだろう。夫婦を取り巻く微妙な人間模様まで想像できるところが面白い。氏の情景の切り取り方が鮮やかなのだと思った。直感と表現が行き届いていて、俳句の楽しさを教えてくれる作品と思う。

緑の夜サンバに乗って料理来る

河原地英武

「伊吹嶺」八月号

サンバといえは、ブラジルのリオのカーニバルがすぐ浮かんだ。

あの華やかな衣装を着けた美しい女性が、サンバのリズムに乗りながらブラジル料理、例えばバーベキューや豆と肉の煮込みや、流行りのアサイーボウルなどを運んでくれたのだろう。季語の「緑の夜」がまた良い。新緑の燃え立つ夜のテラス席でブラジル料理を頂く。盛夏を迎えるに当たり、大いにエネルギーチャージができたことだろう。

### 暮鳴くや煙雨の中の恋の声

高崎 公久

「蘭」七月号

子供の頃私は、庭に棲み付いていた墓に出会って大層驚かされたことがあり、それ以来墓のことが大嫌いであった。この作品を見て、「墓」を少し調べてみた。墓の鳴き声については、雌は声を出さず、鳴くのは雄だけという。従って掲句の墓は雄であり、まさに恋の声を上げているのかも知れない。となると俄然中七の「煙雨の中」が良いシチュエーションとなっているように思える。墓のことが少しだけ可愛らしくなった。

### 見るとある目高の甕の目高の子

菅野 孝夫

「野火」八月号

一読してリズムの良さに惹かれた。上五の「見るとある」には、見なければ居るも居ないも分からないのだから、思わず笑ってしまった。そして、目高の甕なのだから、当然目高は居るとしても、目高の子までいたというところで、嬉しい発見があったのであろう。あつけらかんと正直にすつと詠み下している詠み振りが魅力的である。俳句の一物仕立ての強さ楽しさを感じさせてくれる作品となっている。

### 万緑や天守の鯢のどんぐり目

加藤 峰子

「鳴」八月号  
天守によく見られる鯢の目玉は、くつきりと丸々として見開いている。掲句では、万緑に囲まれているからこそ、その目がはつきりと見え、思わず「どんぐり目」と直感したのであろう。鮮やかに景のはつきり見える作品と思う。この八月号は「鳴」通巻七百号記念号である。峰子代表も「長き伝統から一步踏み出し、それぞれが新しい境地を目指して行くことが、結社を活かす新風となるのではないだろうか。」と述べられている。

### 秘め事のやうに空豆食べけり

村松 二本

「樵」八月号

「秘め事のやうに」とはいかにも「大事そうに」食べたといふことの比喩であろう。初夏、お店に空豆が出始めると、待つてましたとばかりに買い込む。先ずは手を青臭くしながらも剥いて、サツとゆで上げつまみ食い、いや試食をするだろう。または、家庭でも居酒屋でも、皿から一粒つまんで一足早く初夏を味わおうと秘め事のように食べたのかも知れない。

### 太刀払ふやうに揚羽の翅さばき

堀本 裕樹

「蒼海」八月号

この作品も「やうに」の使われた比喩の作品である。比喩はびたりと決まらないと成功しない。この場合、揚羽の飛ぶ時の翅の捌き方を詠んでいる。「太刀払ふ」とは幾たびも振り下ろされる太刀をひらりひらりと躲している翅の様子である。実際には太刀は見えないのだけれど、見えるかのような臨場感がある。人の生き方にもこの翅さばきが欲しくなると思えてきたりする。